

आयुस्、あーゆす

〈発行〉 京都文教大学・京都文教短期大学図書館
京都府宇治市横島町千足80

★ 沖縄基地問題を考える ★

京都文教大学・短期大学図書館館長

総合社会学部・教授（植民地主義・帝国研究）

遠藤 央

『基地問題の国際比較－「沖縄」の相対化』川名晋史（編）明石書店、2021

『世界の基地問題と沖縄』川名晋史（編）明石書店、2022

防衛予算の大幅増加など防衛力に関する議論がにぎやかになっているが、まずは現状がどうなっているかを冷静にみるのが重要であろう。上記の2冊はそのためには最適なものである。

『基地問題の国際比較』は、基地問題と基地紛争をとりあげ、世界中に展開している米軍基地のなかからトルコ、韓国、サウジアラビア、グリーンランド、スペイン、シンガポール、イタリアをとりあげ、比較している。川名によれば「2017年9月時点で世界には514の米軍基地がある。しかし、そのなかで基地が接受国で政治化しているケースは多くない」としたうえで、基地紛争の理念型を、「各々の領域に属する基地紛争の違いを最小限にとどめ、かつ異なる領域に属する基地紛争の違いを最大化するように設計」し、「利益配分の失敗」、「外的脅威の低下」、「政府への信認の低下」、「国民的ナショナリズム」の絡み合い方から考察している。

終章では、「基地問題への対処のパターンとして、①基地の不可視化、②多国間枠組みの構築、③三者間協議の実施を抽出している」。不可視化の3つのパターンは隔離、遮蔽、共同使用である。そして隔離の視点から、普天間基地の辺野古移転を考察している。

『世界の基地問題と沖縄』は沖縄の本土復帰50年にあたる2022年に意図的に出版されたようである。はしがきで、「比較の有効性は、実際の米国による基地の運用の問題に鑑みても疑いようが

ない。結局のところ、沖縄は米国の世界的なネットワークの一部分にすぎないからである」と指摘し、「比較を容易にするために、共通する4つのテーマを置いている。第1が基地の歴史であり、第2が東海国での基地問題の性質とその解決に向けた政策である。第3は地位協定であり、最後が沖縄への含意である」。

本の構成を紹介したい。「序章ではまず米国の世界的な基地ネットワークの全体がどうなっているのかを概観する。それをふまえて、第1章では、本書の土台となる沖縄の基地問題の性質を確認する。その後、第I部 [欧州]、第II部 [中東・アフリカ]、第III部 [アジア・太平洋]、第IV部 [米領] に分割し、米軍基地を受け入れる計13の国と地域を取りあげる。そのなかには、日本の山口（岩国基地）、そして日本の海外基地であるアフリカのジブチの事例も含まれる。また、米国の海外領土であるグアム（準州）とプエルトリコ（自治連邦区）も取り上げる」となっている。

ずいぶん以前のことになるが、グアム経由でパラオに向かっていた際、グアム空港で航空機の車輪が故障し、空港が閉鎖されたときに、乗っていたコンチネンタルの飛行機は米軍基地に着陸し、バスで空港まで送迎されたことがある。日航や全日空の飛行機はサイパンにまわされたが、アンダーセン基地の滑走路には民間であるコンチネンタルの飛行機が6、7機、並んで停まっていたのである。米軍とコンチネンタルは密接な関係があるといわれているが、それを身をもって体験したのであった。つまり、民間の軍事への関わり方も実は考慮する必要があるのである。

（えんどう ひさし）

❁❁❁ 「本」のある場所 ～親しみと記憶を育むために～ ❁❁❁

京都文教大学学長

総合社会学部・教授（文化人類学・東南アジア研究・観光学） 森 正 美

地元の小学校区内の商店街に書店があった。そこで中学1年の時に初めて文庫本を買った。3階建ての小さなビルで、1階には雑誌や子供向けの書籍、2階、3階には、大人向けの文庫本や小説、参考書、専門書が配架されていた。かなり悩んで選んだのは、芥川龍之介『蜘蛛の糸・杜子春』だった。今ではこれらの作品は、著作権なしの「青空文庫」としてネットで誰でも読める。ただ当時の私には、文学全集の一部が手のひらサイズで自分のものになったことが不思議で嬉しかった。自分のお金で本を買うという経験と、文字の大きな子供向けの本ではなく挿絵なしで持ち運べる小さな文字の文庫本が、大人への仲間入りの証のようだった。

小学校には、低学年向けと高学年向けの図書室があった。低学年図書室は南向きの3階の角にあり、初めて入った時に、ずらりと並ぶ本と明るい日差しですべてがキラキラしてみえて「この部屋の本を全部読んでいいんですよ」ときいて「やったー！」と思った。毎日1冊ずつ借りて読んだ。放課後は友達と遊ぶので忙しく、時間が足らず布団の中でこっそり読んだりもした。続きが読みたくて、学校の帰り道に歩きながら読んで叱られたこともある。毎日借りるので、本を選ぶ手間をかけずシリーズを読破するという読み方をしていた。伝記が大好きだった。高学年になると、図書室は薄暗く落ち着いた本館の1階になり、利用する児童も少ない静かな空間になっていた。いろんな全集があったが、私は小川未明全集と世界のドキュメンタリー全集がお気に入りだった。中学になると、図書室に誰かがいることはほとんどなく、ロシア文学全集と萩原朔太郎や中原中也の詩集を借りたこと、友達に「その本面白いの？」と言われたことくらいしか覚えていない。高校では、図書室の所在も様子も思い出せない。そもそ

も本を読む時間も減っていたし、読みたければ自分で文庫本を買っていたからだと思う。古典の授業中にこっそり三島由紀夫『金閣寺』を読んでいて、その後職員室で「森さん、三島のどこが面白いの？他にはどの作品を読んだの？」とお薦めを教えてくださいました先生のニヤリとした笑顔は今でも覚えている。大学の卒業研究以降は、日本でも海外でも司書の方々の力を借りて、資料探索の場として図書館を利用するようになったので、それまでとは関わり方が大きく変わった。

本の中の知識や言葉、考えに触れることは、私たちにその時々に必要なヒントや導きを与えてくれる。ただ、改めて、自分自身の本との関係を思い出してみると、長い年月の中では、本の中身そのものよりも、本との出会いや本のある空間、本にまつわるやりとりや経験が、一連の心象風景として浮かび上がってきた。感動・共感する書物の内容は、人によってそれぞれかもしれないが、本のある場所の記憶はもう少しゆるやかに共有できるかもしれないし、知識記憶が薄れても体感的な記憶として深く残るような気がした。こういう感覚が「親しみ」ということかもしれない。

これまで大学の図書館は、研究情報収集や学習の場としてデザインされてきた。この読書・活字離れといわれる時代、情報が複雑化する時代にこそ、キャンパスでも、本のある場所、本に親しめる空間が、学生たちの未来の心象風景に残るような経験や仕掛けの工夫が求められている。これまでも様々な努力が積み重ねられてきているが、さらに次世代に向けた新たな発想で考え、卒業したあとも、京都文教大学の図書館の風景がどんな風に皆さんの記憶に残るのか、そのイメージを一緒に描いていければと願っている。

(もり まさみ)

図書館と喫茶店と、ソーシャルワークと演劇と

幼児教育学科・教授（社会福祉学・ソーシャルワーク） 渡邊 慶 一

大学から大学院にかけて、いや、現在もそうかもしれない。グループを媒介としたソーシャルワークについて学究すること、演劇の創作と上演に魂を注ぎ込んできたこと、その過程における数多の出会い別れが、現在の私を支える原点であり、源泉にあるといえる。

“声なき声”という表現が用いられることがある。グループやコミュニティの力を通して、社会的弱者と呼ばれる人々の内に眠る訴えかけやSOSに耳を澄ます感受性、これが求められる領域で学びを温めてきた。

一方、演劇では、あえて強烈で刺激的な言葉を象徴的に選び取るにより、差別や悲劇の構造を浮き彫りにする手法がよく用いられる。大学の先輩との出会いにより、当時は、つかこうへいに傾倒していたため、知る人ぞ知るその劇構造や口立ての手法を採り入れて劇作していた。

表面的に見れば、私の専門領域と劇構造は相容れないと感じられそうなのだが、そのどちらもが、どのような言葉を紡ぎ出すことができるか、語られた言葉が他者に対してどのような意味を持つものなのか、このことを常に、研究と教育の両者に携わる者としての私に、課題として突き付けてくれていたのだと思えてならない。

言葉が他者に届き、心に触れるということはどのようなことなのか、そして、それはどのようにして可能となるのか、それを考え続けてきた。そんな私がかつて好んで出沒した場所が、喫茶店と図書館である。

専門領域の文献や上演台本など、何か創作したり執筆したりするときは、まず、珈琲の香り漂う中で、私も思索の世界を漂流するのだ。決して、カフェではない。喫茶店なのである。いわゆるカフェでは珈琲の香りが弱い(気がする)。私にとっては、珈琲の香りが創作のスイッチの切り替えに欠かすことができない。欲を言えば、カウンター

の角の席が空いておれば、なおのことよい。発想や閃きが産声を上げる場所である。

片や、書籍の香り漂う中で、知の泉を漂流し、言葉の奥深さを味わうことができるのが図書館である。書籍の香りは、筆が進まぬ私のモチベーションとなった。と同時に、図書館は、“声なき声”に寄り添い、“声なき声”のパワーをかたちにしてくれる言葉や、強烈で刺激的な語感を備えた言葉等々に満ち溢れた、数珠の“ことばたち”(言葉という言葉の力を携えた精霊たちのことを指して、「ことばたち」と呼んでおこう)との出会いの場でもある。そんなことばたちに会おうと、勇気づけられもするし、切なくもなるし、憤りを禁じえなくなるほどの過酷な状況に置かれた人々の声に触れることもある。

私は現在、保育者の養成に携わるソーシャルワークを専門とする研究者である。日頃より、自らに対して、言葉というものに向き合い、もっとセンシティブであるべきだと、自問自答してきた。言葉は自らを救う武器にもなれば、他者を傷つける刃にもなる。傷ついた人々や病む人々など、さまざまな事情を抱えた人々を前にすると、表面的な言葉など何ら意味をなさない、思い知らされることがある。なぜならば、私はその人たちの言葉に心を揺さぶられるほどの経験をしているが、今、私は、この人たちの心の奥底に届く言葉を語ることができているのか、幾度となく、自分の無力さや自分の繰り出す言葉の至らなさを悔いる経験をしてきたからに他ならない。

だからこそ、私にとって、喫茶店は、ひと時の休息を与え、静かに自己と対話できる場であり、図書館は、心を鎮め、自らが紡ぎ出そうとする言葉より、より研ぎ澄まされた言葉との出会いを模索しながら、言葉そのものと対話できる場だったのである。

(わたなべ けいいち)

こういった、誰かが手に取って読む可能性のあるものに、文章が載るのは初めてである。ドキドキしながら、キーボードを叩いている。けれど同時にわくわくもしている。自分が打ち込む文字が、紙に印刷されるということは、この世に自分の生み出した表現が物質的に残り、誰でも手にすれば解読できるということだ。これはなんだか、うれしい。

さて、早速本題に入るが、私は本が好きだ。そのページをめくる手触りも、音も、匂いも好きだ。これは、幼い頃から本に囲まれて生活していたことに端を発している。

私の両親は多忙で、幼児期の平日の日中は祖母の家に預けられていた。祖父は中学校の教師であった。教育に携わる職だからか、祖父は多くの本を持っていた。興味を示すのは必然だった。私は手の届く本なら、絵本から祖母の花の種のカatalogまで読んだ。本の虫として順調に成長し、小学校の頃には図書館に常駐するレベルで蔵書を読んだ。特に好きだったのは、上橋菜穂子先生の本である。独特の世界観や、私たちが生きる世の中とは似ても似つかない社会でありながらも、登場人物に感情移入できるところに魅了された。上橋菜穂子先生の作品を片端から読んで、何度も繰り返し読んだ。その中でも「獣の奏者」と「狐笛のかなた」は近所の図書館や図書室のものを独占する勢いで借りて読んだ。これらの作品だけでなく、ライトノベルから司馬遼太郎、横溝正史、有川浩など様々なジャンルの作品に触れた。多くの本が私の考えや行動に影響を及ぼした。小学校の高学年の2年間を図書委員として過ごし、中学校でも図書室に入り浸った。高校時代には、よくある多感な時期で他人と気が合わなかったり、部活の社畜ならぬ部畜になったり、受験期のストレスがあったり、と山ほどのちっぽけな悩みがあったが、それを忘れさせ、時には解決に導いてくれたのが本だった。本には力がある。人の思いを文字という形で具現化してくれる。知らない体験や、知らない世界を、他人の目を通して見ることができる。顧問と人手不足とその他問題の山積で胃痛が頂点に達しては、部活を抜け出して図書室に籠城したし、テスト期間にも図書室で勉強していた。先生からは「実は図書室に住んでいるのではないか」と言われたことさえある。このようにして立派な本の虫として成虫になった私であるが、最近思うことがある。

近年の学生は本を読まない、と説教的なニュアンスを込めて言われたことがある。また、最近の人は読まないもんね、と諦めと揶揄を込めて言われたこともある。これに対して、私は違和感を覚えた。まず、私だけに限って言えば、これで本を読んでいないなら、読書家の域はどこから始まるのだろうか、という疑問がある。もしかして、見

えないガラスの天井というものが、読書家の中にも存在するのだろうか。少なくとも、私は一度も聞いた事がない。そして第二に、本を読むことが是とされる価値観はどうなのだろうか、と思う。私は本が好きだ。これは揺るがぬ事実であるが、同年代全員がそうであるはずがない。十人十色、千差万別、といった言葉があるように、気が合う人は居てもすべてが一致する人間など居ない。クローンであっても、環境が異なればオリジナルとは別の個性を有するようになる。私のように、幼少期から本に囲まれ、文章や物語を好む人間もいれば、体を動かすことが好きな人もいるし、音楽や絵で自己表現する人もいる、映画が好きな人も、食べるのが好きな人も、ゲームが好きな人も、寝るのが好きな人も、人と一緒に居るのが好きな人もいる。その上、現代はSNSなどインターネットを利用したコミュニケーションや娯楽が多い。選択肢が増えたなら、読書という選択をする人間が減るのは、別段おかしい話ではない。私は本が好きで、文章で自己表現を行うのが好きだが、それが全員にとって好ましい事である必要はどこにもないのだ。これを簡単に言うと、よそはよそ、うちはうち、という少々ステレオタイプなお母さんの常套句で表せる。

自分にとって良いからといって他人に良いとは限らない。本を読んでいないからと言って、知識が足りないと思われる謂われもない。本で情報や物語を得ない人は、本では得られない分野の事を多く知っているのだ。知識に高尚か低俗か、などという価値の序列はないし、考えや知っていることに相違があるからこそ、自分の考えや新たな発想にたどりつくことができる。ジョハリの窓に盲点の窓が存在するように、違いがあるからこそ分かることがある。故に、人がどのように考え、生きているかは尊重せねばならず、本を読まない、読む、で人の知識を測ろうとするのは如何なものか、と私は思う。

もちろんこれも、いち本の虫である私の考えにすぎない。これが絶対的に正しいことだとは思っていないし、強要する気もない。ただ、この紙面を手に取って、たまたま最後まで読んだのなら、ほんの少し、ウルトラマンの変身時間より短くてもいいから、考えてみて欲しい。本を読んで得られることや、本以外に触れて得られること、自分が何を好きで、何を面白いと思うのか、自分の知っている人と好みはどう違っているのか、同じものが好きならお互いどのようにそれを見ているのか、そういうことに思いを巡らせてみてほしい。他者を知ることで、見えない自分が視認できるようになるかもしれない。少なくとも、私はそのきっかけを、本という存在に見出している。

(かねふさ あいか)

🍁 『おじいさんのランプ』から考える現代の本のあり方 🍁

臨床心理学部 臨床心理学科 深層心理コース1回生 稲本 拓真

後期課程に入ってからの授業で、キャリアと自己形成という授業を受ける際に、講義を担当される先生が、新見南吉を授業の題材として講義をされていました。彼の書かれた作品の背景にはどんな過去があったのかということ、作品の説明とともにわかりやすい授業が展開されていました。その中の一つとして出てきたのが、今回私が題材にする『おじいさんのランプ』です。私がこの話を初めて読んだ際、老巧な文章に心躍った記憶があります。

この話は主人公である巳之助が孫の東一に、自身が子供のころの思い出話を語る形で話が進みます。

ひよんなことから仕事でほかの町へ出向くことになった巳之助がその町で見たのは、自身の町では見ることがないランプでした。ランプに心を奪われた巳之助は故郷でランプを売る商売を始め、次第に成功をおさめます。ただそんな月日も永遠ではなく、村に電気が通ることになり、ランプが不要になることを恐れた巳之助は区長を恨み、しまいには家に火をつけようとしてしまいました。しかしマッチを探しても見つからなかったため、火打の道具で火をつけようとしていましたが、古い道具で火は中々付かないという始末。その時巳之助は古い道具に固執する自分の間違いに気づき、家に戻りランプを処分して本屋になったという話です。

この話を読み、おじいさんが本屋になるというのは至極当然なのかなと思いました。ランプを商いとしていましたが、時代の変化に対応できず廃業を余儀なくされた。そうなれば不変であろうものを商いとするというのは、安定した収入のためには必須であるためです。ですが今、長きにわたって変わることがなかった本の形も、電子機器の発展によってあるものが台頭し、その地位が脅かされています。それは「電子書籍」です。

そもそも本の起源としては、6世紀初めに遡ります。修道士が、羊皮紙を半分に折り、羽ペンで聖句を書き写し、それを4枚おきにひもでまとめたものが初期の本とされています。そこから紙の材質こそ変わりはしたものの、形を大きく変える

ことなく、今現在の21世紀へと続いてきているわけですが、そんな中での電子書籍の台頭。一体どんな部分が評価されているかを、本と比べて考えていきます。

私はまず一つ、持ち運びに関する点が評価されていると考えます。本来、本といえば手に収まるサイズといえども、カバンの中で場所をとる、折れ曲がる、汚れるなどといった心配事が後を絶たなかったのですが、それが今やほぼすべての人が持ち歩くスマートフォンで簡単に読めるとなると、スペースを圧迫せず、尚且つ本が傷つくこともないというのは、魅力的に感じるのではないのでしょうか。

次に利便性です。紙の本の構造的に、両手で持ちながらでない安定して読むことが難しいという点がありましたが、それが電子書籍になることにより、片手を空けたまま読むことができるようになりました。今多くの人のメディアの消費活動は、「～ながら」というのがトレンドなので、作業しながら読めるというのは多くの人に歓迎されるのでしょう。

そしてなよりの利点は、電子書籍のもつ即時性だと私は考えます。広告やSNS、人からの紹介といった形で本を知るといった機会が増えた今、本屋に出向く必要なく、すぐに購入でき、読み始めることができるというのは最大の利点です。

ここまで電子書籍を絶賛してきましたが、もちろん紙の本にも良いところはあります。本屋での刹那的な出会いや、電子書籍よりも記憶の定着につながりやすいということも言われています。『おじいさんのランプ』でも、ランプの需要がすぐに尽きることはなく、必要とされる場面があったことが示されていますが、今後紙の本が迎える道筋は再びの繁栄か、はたまた衰退か。非常に興味深いと感じました。

今回取り上げた『おじいさんのランプ』は、題名の後ろに青空文庫と入れて検索していただければ読めるので、ぜひ読んでみてください。

(いなもと たくま)

🌸🌸🌸 私のすすめる3冊（私の推薦図書） 🌸🌸🌸

臨床心理学部 助教（臨床心理学） 不破 早央里

◎ 「心理療法論」

伊藤良子著 京都大学学術出版会 2011

臨床心理学の中でも「心理療法」「カウンセリング」に特化した入門書です。大学に入学して間もない心理学初学者の時に初めて読んだ本で、その後何度も読み、改めて買い直したほど思い入れが深い1冊です。カウンセリングにおけるセラピスト（治療者）とクライアントの関係である「転移」についても詳しく書かれています。最初読んだ時、私は「本当にこのようなプロセスが起り得るのか」と疑問に思い、その問いを追い求めて、私は今もなお臨床心理学を学び実践し続けています。

◎ 「ユング 夢分析論」

C.G. ユング著 監訳 横山博 訳者 大塚紳一郎 みすず書房 2016

ユングを学びたい方に「何から読むのがよいですか」と聞かれると正直迷いますが、「夢」に興味のある方におすすめしたい1冊です。ユング心理学において夢は重要視されますが、意外とユングの夢に関する著作はあまり多くはありません。これまで入手しにくいものも多かったですが、本著作が刊行されたことで数居が低くなりました。夢分析の基礎に関する内容も含まれていて重要な1冊です。偉大な分析家ユングが自分の夢分析の失敗を取り上げているところなど、ユングの親しみやすい人柄が感じられて、彼の人としての魅力を感じることもおすすめポイントです。

◎ 「心理療法のポイント」

藤山直樹 監修 大森智恵 編著 藤巻純 著 吉村聡 著 創元社 2018

臨床心理学の大学院生にお勧めしたい1冊です。精神分析をオリエンテーションとする先生方の事例検討会の雰囲気、ひりひりするほど臨場感をもって感じることができる本です。私は精神分析をオリエンテーションとしていないのですが、「一つのセッションの記録から、これだけの密度をもつ事例検討をするのか」と驚き、そして、学ぶところがたくさんあります。それが、本の文章から得られるかけがえのない著作だと感じます。

（ふわ さおり）